

おなまえよんで

コボコボ

理科室の中に、ちっちゃな音がしてるミポ。

まあるいガラスの中で、怪しい色の水が、あぶくたてるミポ。

その前に、長い髪の子。

「ふふ。もう、ちよつとで完成ね」

わたし、知ってるミポ。これってまるで

そう、

魔女のなべミポ。

「ふふふ。うふふふふ」

こ、こわいミポ！ほのか、こわすぎミポ〜ッ！！

「じゃ、また明日ね」

ラクロスの練習終わって、もう夕方。下駄箱に行くみんなを見送って、あたしはそのまま校舎に戻ろうとした。

きょうはちよつとキツかったなあ。ま、2年になつてはじめての試合が近いから、これでも軽いくらいか

「え〜？なげさ、一緒に帰らないのあ？」

おつとつと。莉奈りなの声といっしょに出てきたラケツトに、肩つかまれちゃったよ。

「こら。ど〜こ行くの？」

ああ、そういえば、言ってなかったっけ。

「ええと　ちよつと、約束してるから」

「でもでもでも、駅前にできた喫茶店、一緒に行くっていったよね、ね？」

志穂しほ「たらあいかわらず、食い気いっばいだなあ。まあ練習のあとだし、あたしも人のこと言えないけどな。」

「ん〜、ごめん。約束だから、ね。このとーり」

片手で拝んだら、志穂の背中を莉奈がたたいたわ。

「約束じゃしょーがないよ。だいたい、こんなべたべたな体で、新しい喫茶店入るのもちよつとねえ」

今まで輝いてた志穂の顔が、がっくり下向いちゃった。

「そっかあ　あゝあ。よりによって、こんな日にシャワー壊れなくてもいいのにな」

うん。あんまり人のそば行きたくないし、制服まで汗くさくなつちやうんだよねえ。ほんと、体操着で帰りたいくらいだわ。

「ま、いつか。じゃあじゃあ、こんだは一緒ね？」

立ち直りはやつ！　これが志穂のいいところだよねえ。

感心しちゃうわ。

『むっつー!!』

あ、ヤバッ！

「あれ？」

「ねえねえねえ、なんか、聞こえない？」

あたしは、飛び跳ねてるポシエツトつかんでカバ

ンに押し付けながら、ろつかの方に移動した。

「う、ううん。なんにも　それじゃねー！」

うわ、カバンごと跳ねはじめちゃってるよ。もうちよつと待っててば!!

ひとのいない理科室って、なんか不気味なのよねえ。こんなところ、よく何時間もいられると思うわ。

でも考えてみると、体育館ならひとがいなくても全然へいきなのよね。どっちもどっちが。

『むっ！　むっつっ!!』

ああ、またポシエツトが暴れてる。もう、うるさいなあ。ここ入るのは、勇氣いるんだってば。

すう　はあ　ん。よし！

「おい、雪城さん。来たわよあ」

理科室のとびら、ガラツと開けながら、あたしは部屋の中見回した。机ばっかの広い部屋で、教壇の

5 おなまえよんで

いすにひとり、ぼつん、って座ってる。

「あ、美墨さん。いらっしやい」

「い、いらっしやいって、ねえ。ここはあなたの巢かい？」

『むっうツツ!! 「うらあーなきさ!!」』

あ、いつけない。口に貼つといたハンソコ、はがれちゃったか。

『「うらあッー早く出すメボッツ!!」』

ああ、はいはい。ラブラブね、いいわねラブラブ。

よいしょと。

「ミップルッ え!?!」

変身して飛び出してつたメップル、雪城さんに抱えられちゃった。

「ちょっとまってね。理科室のすみに、遊び場を作ったから。ふたりとも、そこにいてくれる?」

遊び場? ああ。よく見てみたら、すみっこの方に囲いがしてあるわ。けどあそこってたしか

「ねえ、あんたたち。ホントにあそこでいいの?」

「ミップルは、メップルといっしょに遊べるなら、どこでもいいメボ」

「ぼくもいいメボ」

ふたりともその気だわ。あたしたち置いて、さっさと囲いの中に入っちゃった。

あたしは、雪城さんにちよつとだけ近寄って、そつと聞いてみた。

「ねえ、あそこってたしか、実験のゴミ捨てるどころじゃなかった?」

メップルたちに聞こえそつで、つい小さな声になつちやう。けど、雪城さんはいつもの声で、

「そうよ。ちゃんと掃除したから、ちよつと見ただけじゃわからないでしょ?」

いや、そういう問題 かなあ?

「誰か来てもふたすねばわからないし、ちよつとくらい暴れてもいつもの事だもの。ちよつどいいわ」

「はあ。おとなしい顔のくせに、結構いい性格してるわ。この子。」

「ミップル、いまの聞こえたメボ？」

遊び場に入ってから聞こえてきた言葉に、ぼくはがつくりしてしまったメボ。

「勇敢な騎士が、ゴミ箱の中で遊べと言われるなんて 恥メボ」

肩でためいきついてたら、笑い声が聞こえたメボ。

「ミップル？」

顔を上げたら、ミップルが手を広げてるメボ。

「校庭が見わたせるゴミ箱なんて、あるメボ？」

手の先を見してみると、たしかにそつメボ。窓側の壁は外されて明るいし、ボールに鉄棒に、プランコは手作り。とてもゴミ箱には見えないメボ。

ミップルがくすくす笑ってる。ぼくがきよるきよるしてるの、おかしかったメボ？

「ふふ。笑ってごめんメボ。 ね。ほのか、よく考えてるメボ？」

うん。なぎさと同じくらい考えてるのは、ぼくにもわかったメボ。

「よおし。じゃ、まずプランコ乗るメボ」

「ミボ♡」

「でさあ。ラブラブのふたりが遊んでるあいだ、あたしたちどうしよう？」

理科室の机に腰かけて、足をぶらぶらさせながら言ったら、雪城さんが近づいてきて

「あ、ちよ、ちよっと」

あたし、思わず手でおさえちゃった。

「どうかしたの？」

おっきな目ひらいて、首かしげてる。ああ、あんまり説明したくないんだけどなあ。

「うん。練習終わって部屋戻ったら、シャワーこわれちゃってさ。汗くさいでしょ。ごめんね」

7 おなまえよんで

そしたら雪城さん、もつと目を見開いたわ。

「におうのね？」

「え、あ、うん」

目が大きいだけじゃなくて、輝いてる。

「くさいのね？」

むっ。そんな目で、そこまで言わなくてもいいじゃない。

ひとこと言っただけかと思ったら、にっこり笑って あ、あれ？ あたしの方に顔近づけて、くんくんかいでるよ。うう、ちょっとイヤだなあ。

「これならいいかも。よかった。これで試せるわ」
そのまま、理科準備室に歩いてっちゃった。いつものことだけど、この子もよくわかんないなあ。

ああ、準備室の入り口でこっち見て、手招きしてる。ま、行ってみよっか。

「ふふふ。これこれ」

「ごちゃごちゃしてる理科準備室の奥から、雪城さんが取り出したの、コロンのびんだった。」

「これはね、普通はなんの匂いもないんだけどね？」

雪城さん、自分の手にシュッって吹きかけてから、あたしの顔の前に出した。 うん。なんにもおわないわ。

「でも ちょっと手を貸して」

あたしの手にも、シュッって吹きかけた。 あれ？

「これ、花の匂い？」

あ？え？ さっきは、たしかに何にもにおわなかったはずなのに??

「ふふ。うん。これはね、汗のおいを別の匂いに変える薬なの」

へえ、なるほどねえ。キャンディ作るだけじゃない

んだ。さすが雪城さ え!?

「ちよ、ちよつと雪城さん。なによ、それ!」

背中の方から転がしてきたのは、おっきなスピーカーみたいなもの。

「ん? だって、こんなスピーカーじゃ、いつまでたっても終わらないでしょ? 全身に吹きかけるんだから」
全身に、って ヤバっ!!

「あ、あははは。じゃ、そついうことで え!」

理科準備室のドアが、開かない!?

おそろおそろ振り返ったら、雪城さんがにっこり笑って、ひも持ってる。ひもの先には、あのスピーカーもどき

「大丈夫よ。多分」

た、多分って、ちよつとお!

「覚悟っ えい♡」

ボンッ!!

「ぶわっ!!」

ブランコにふたりで乗ってたら、いきなり大きな音といっしょに、ぐらぐらゆれたメポ。

「ミッブル?」

「な、なにミポ?」

「なにかあったメポ。また、ドックゾーンの」

「こんなところで遊んでる場合じゃないメポ。今すぐ、なぎさのところに」

「だいじょうぶミポ」

ん? ミッブル、妙に落ち着いてるメポ

「ミッブル。なにか、隠してないメポ?」

「そ、そんなことないミポ。 ああ、ほら、ほのからボールもらってるミポ。ボール投げ、ひさし」

ぶりミポ♡」

ミッブルと、ボール遊び ま、まあミッブルが

だいじょうぶって言うなら、ちよつとくらいはいい

メポ。ミッブル♡

いきなり目の前が真っ白になって、くしゃみが止まんない。っていうか、口の中じゅっ、へんな味いっえ、気もちわるい。

ん？くしゃみが止まった。うあーなにこの匂い!?

「うん。成功ね」

ひも握ったまんま、ほのかが笑ってるよ。

でも、これで成功って

「たしかに汗のおいはなくなっただけさ どおすんのよ、この全身ロンまみれみたい匂い!」

ああ、きよとん、って顔でみてるよ。本気?

「これで、電車に乗って帰れるの? ありえないうっ!!」

あ、もう。だから、無責任にくすぐす笑わないでよ。まったく。——って、ちょっと待って。たしかほのか、さっき ああっ!

「ほのかっ! あんた、その機械使ったとき『覚悟』って言ったでしょッ!!」

もう。最初っから楽しむつもりでやったな、こいつわっ!

「ちょっと、ほのか! 聞いてんの!?!」

ずいっくと一歩近づいたら、またにっこり笑って、首かしげてる。

「なあに。な・ぎ・さ?」

う。そっか。思わず名前で呼んじゃったんだ。

いつもは『雪城さん』って感じなのに、今日はまるつきり違うから ひょっとして、わざと?

「ね、どつしたの。な・ぎ・さ?」

プチ。

「こうなったら、おなじ匂い、つけてやるっ!!」
とりや、って抱きついて、制服の匂いこすりつけてやる。もう。

「きゃあくすぐったあい♡ 忠太郎みたい♡」
あ、あ。喜んじゃって。

「うふふ。忠太郎より、毛がやわらか〜い♡」
 あたしの髪の毛、犬より硬いわけないでしょ!!
 もう、覚悟しなさい! その長い髪の毛、とことん見つけてやるっ!!

ん? あれ??

「ちよ、ちよっとう!」

うわあっ! なに、このにおい?!

「あら。ほんとに忠太郎になっちゃったみたい。同じにおいだわ」

忠太郎って、そんな。

「ありえないっ。こんなの、犬のおいじゃないわよ!!」

ああ、鼻がおかしくなっちゃう、このにおい。このまえ飛びつかれたとき、こんなにおいしてなかったわよ?

「ううん、そうよ。いつもはにおわないけど、雨にぬれたりするとこうなるの。きつとわたしの制服に、忠太郎の毛がついてたのね」

あーっ、もう、洗濯、洗濯っ! 洗濯機どこにあるのよあっ!!

バタンツ! って大きな音がして、足音が部屋から出てったメボ。

「あ、失敗ミボ?」

遊び場のふたを開けてまわり見てたら、下でミッブルがひとりごと言ってるメボ。

やっぱり、なにかたくらんでたメボね。

「ミッブル、なんだか知らないけど、ふたりを信じなきゃ、だめメボ」

「信じてはいるミボ。けど ふたりとも、まだ名前で呼びあつてないミボ。もうちよっとう、仲良くなっ
てほしいミボ」

しゅん、としているミッブルだけど、背中のにりに、キラッと光るものが見えるメボ。あ〜あ。

「その、背中に隠したのはなにメボ？」

そーっと取り出した銀色の工具。横に、『水道用』
なんて書いてあるメボ。

「メッブルだって！ なぎさの友達の前になるとわ
ざと暴れるの、知らないと思ってるメボ？」

ぼくはミッブルと顔見合わせて、

「はあ」

いっしょにため息ついた。こんなのハモっても、あ
んまりうれしくないメボ。

ふう。手芸部の部活が終わっててよかった。

被服室の大きな台の上で、あたしたちの制服が仲
良くゆれてる。

ぬらしたタオルでからだ拭いて、あのおい落と
したあたしは、体操着姿で制服見た。

ほのかは、さつきからとなりで本読んでる。こー

ゆーとき、読書の趣味あると楽しだよ。

それを横目に見ながら、あたしは、考えてた。

今日のほのか、いままで見てたのと違うわ。なん
だかのんびり、リラックスしてるみたい。

さつきは思わず抱きついて、からだすりつけたり
なんてしちゃったけど、いつもだったら絶対ありえ
ないわ。

一緒に行動して、一緒に変身して、一緒に戦って
でも、いまはまだ、それだけなんだから。

って、ことは、ひよつとすると？

「ねえ、ぼの」

「なあに!？」

うわ、すごい反応。いきなり振り向くと思つてな
かったから、びっくりしてなに訊くか忘れちゃった
じゃない。ええと あ、そうそう。

「雪城さんさ」

あれ？ 今度は、いきなり横向いちゃってる。

へえ、こんな顔もできるんだ。なんだか、見てるとつい顔がゆるんじやうな。

あ、本の影から、ちらつて目だけこっち見てる。くちびるとがらせちゃって、もう♡

じゃなくて。

「まさかと思うけど、体育館のシャワー壊したのって？」

ああ、あきらめたみたい。ふう、ってひとつため息ついでから、

「やあね。そんなことしないわよ」

そりゃそつよね。あたしも、なに考えてんだろ。いつくら雪城さんでも、そこまでは

「わたしはね。ミッブルは　うふふ♡」

やっぱり、やったんかい！

ああ。ちょっと、頭がかえたくなってきたわ。

ん？

体育すわりで頭がかえてたら、頭のとっぺんがなんかへん。なんだろ、これ？

「あ」

あてツ！ 起き上がったら、プチツって首と痛み。そっか、髪の毛引っ張られてたんだ。

「何やってんの、あんたは」

となりのほのか、本を持ったまま目だけこっち向いたわ。

「え？ ん、本を読んだの」

それは見ればわかる。けど、

「ふうん。で、これは、なに？」

あたしの顔の近くで、右手の人差し指が、びくびく動いてるじゃない。

「ん。なんかね、手元がさびしいなー、って思ってたら、ちょうど手の届くところにあっただから」

まだくいくい動いてる指見ながら、あたしは、甘
噛みでもしてやるうかと思つた けど今日のほの
かじゃ、なんだか喜ばしちゃうよつな気がするなあ。
はあ。

「何人にもコクられてんでしょ？ そんなのは、彼
氏つくつてやればいいじゃない。」

「学校で？」

う。そ、そりゃ女子部でそんなことしたら大変だ
けどさ。

「ん？ でも、わたし興味ないし。それに、男の
子って、こういうことできなさそうじゃない？」

思わずあたしとあの先輩とで想像して 納得。
ちよつと、ヤかも。

「こうして本があつて、なぎさがそばにいて こ
れなら、他になにも要らないわ♡」

あ、また強調してる。ん、でも。

「つたく。それじゃ、あたしが雪城さんにコクられ
てるみたいじゃない」

言ったとたん、ほのかが本を口元に持ってきて、上
目づかいになった。

「いや？」

うるうるしてるつもりなんだろうけど、目が笑つ
てるわよ。もう、冗談なのはわかつてるけどさ。

「最初から女の子は、ヤ・ダ」

べーっ、と舌だしたあたし見て、ほのかがくすく
す笑いながら、

「それじゃ、早くだれか男の子に告白されてね」

がくつ。そ、そうきたか。

「だいじょうぶ。待ってるから♡」

また、にっこり笑ってるほのか見ると、本気
なんだか冗談なんだか、だんだんわかんなくなつた
きたわ。

とりあえず、名前で呼ぶのはしばらくやめと。

そう、もっとぶつづに、仲良くなれるまで、ね。